

1 はじめに

現在、教育現場の喫緊の課題として、教職員不足がある。これは、教育力の低下につながり、児童生徒の育成に大きな影響を与える。この課題を克服するべく、学級担任制をやめ、チーム担任制（学年担当制）に取り組んだ。

取組は、4年前の令和3年度から令和5年度までの長洲町立腹栄中学校（令和5年度に統合により閉校）での3年間の実践である。

2 主題設定の理由

5年前（令和2年度）に、以前教頭として3年間勤務した腹栄中学校へ再び校長として赴任をした。教頭勤務時代に、当時2つの学年が、職員の実状などから学年主任兼担任という体制であった。当時の学年主任からは、そのやりにくさも聞いており、それであるなら、いっそ担任の枠をなくし、職員全体で生徒全体を見る体制にできないか、ということを考えていた。その考えを持ちながら、校長1年目を過ごし、職員の私傷病休暇等の実状もあり、教育長にも賛同していただき、2年目に学年担当制へ移行をした。

目的は、職員の良さを最大限に生かし、生徒に安心・安全な教育環境を提供することである。生徒の側からは、担任にとらわれず誰にでも相談できるメリットを重視し、教師側は複数の目で生徒を多面的に見ることができる。また、クラスを意識せず積極的に生徒に関わることができ、職員それぞれの個性が生かされる。職員同士はお互いの良さを吸収し、人材育成にもつながると考えた。

3 学校の実態

腹栄中学校のあった長洲町は、金魚と造船で有名な県北に位置する人口約1万5千人の町である。町には、2つの中学校（長洲中、腹栄中）があり、それぞれ2つの小学校区を持っていた。

腹栄中の学級数は通常学級6学級、特別支援学級2学級で、令和3年度時点の生徒数は196人、県費職員18人であり、そのうち臨時的任用職員が6人であった。平成27年前後にいわゆる「荒れ」を経験した学校は、様々な努力と取組で全体的に落ち着いた雰囲気となり、様々な活動に前向きによく頑張る生徒が育っていた。ただ、課題はまだ多く、厳しい家庭環境や特別に支援の必要な生徒も少なくなく、学力面でも、まだまだ意欲付けや習慣化、定着化が必要な状態であった。

4 取組の実際

（1）職員、保護者への周知と指導体制

令和3年度、最初の企画会議で、学校経営方針として、チーム担任制を提案し（別添資料1）、準備を進めた。職員には、資料1のようなメリットを示した。保護者には、まず、PTA役員会で承認してもらい、別添資料2のような周知を行った。幸い反対や心配等の大きな声はなく、スムーズに新体制がスタートした。

まず、職員に確認したことは、「自分は担任ではない」のではなく、「全員が担任」という意識である。校長である自分自身も全生徒の担任という意識を

【メリット】

- ・一人の目から複数の目で見ることになり、生徒理解の充実につながる
- ・担任との関係で好き嫌いに左右されず、良好な関係になる
- ・生徒はだれにでも相談でき、安心につながる
- ・生徒がより多くの価値観を学ぶことができる
- ・生徒を見る見方が多様化する（決めつけが減る）
- ・担任の負担が軽減される
- ・職員の良さ（特技）が生かされる
- ・クラス間格差がなくなる

資料1

持っていた。メリットと共に資料2のような内容も確認し、全員で全生徒を見ることを強く共通理解した。ただ、3年生の入試事務に関しては、便宜上担当を決め、間違いがないようにした。学年主任を中心に2人の学年担当を配置し、特別支援学級担当の2人と特別支援教育支援員1人も各学年に配当した。学年職員は、特別支援学級の生徒も含めて、全員で学年全生徒に関わるようにした。

- ※3年生は、入試関係があるため便宜上学級担当を置く（考え方は同じ）
- ※特別支援学級は担任を置く（特別支援教育コーディネーターが全体を見る、お互いサポート）
- ※特別支援教育支援員も学年配置
- ※校長、教頭、教務、養護教諭も積極的に全生徒に関わる（必要な場合は道徳等も）
- ※授業時数、部活動等を考慮して役割分担を

資料2

さらに、課題として資料3のような内容を確認し、学年経営をしてもらった。朝の会、帰りの会、給食、道徳の授業等は、学年の裁量で、ローテーションであったり、複数で対応したりした。

学年では、情報交換、情報共有を密にする必要があるため、日課を工夫し時間を確保することで、毎週金曜日の放課後に学年会を位置づけた。

また、生徒及び保護者へは、連絡や相談は、誰にしても良いことを伝え、不安がないように心がけた。

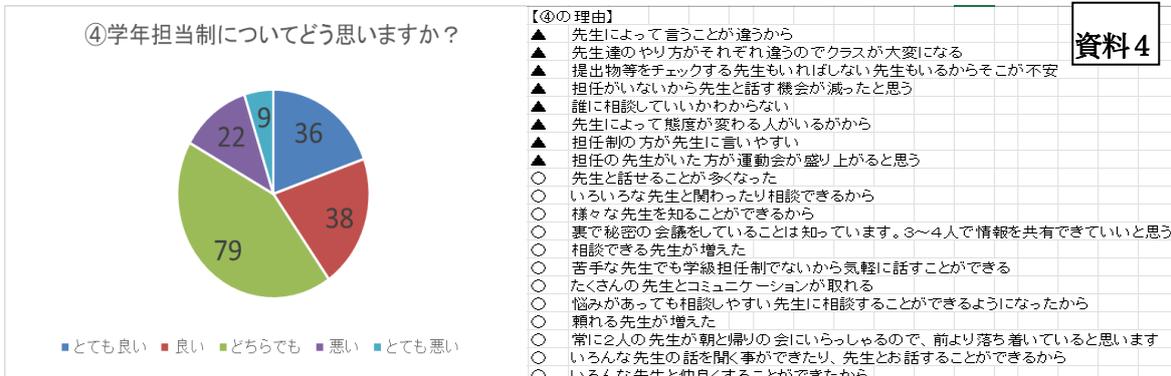
【考えられる課題】

- ・道徳、学活、総合、朝・帰りの会、給食の指導 → ローテーション等
- ・保護者からの連絡・相談窓口・学年主任、学年担当
- ・自学ノート → ローテーションor分担
- ・家庭訪問 → 廃止（相談が必要な家庭は学校で面談・学年複数対応）
- ・教育相談 → 生徒が相談したい先生と（期間長めに設定）
- ・通知表 → 役割分担
- ・指導要録 → 通知表を要録の形式にして自動転記

資料3

(2) アンケート調査と取組の改善

定期的にアンケート調査を実施し、取組の改善に努めた。取組1年目の末に生徒へのアンケートを実施し、学年担当制について意識調査を実施した。その結果、資料4のような結果とデメリットが回答された。このことを、職員で確認し、デメリットについては、改善していくように共通理解を行った。



資料4

(3) 主体性の育成

生徒へは、固定の担任がいないので、学級を創るのも自分たちであるということを意識させた。その結果、徐々に生徒の主体性が育ち、ボランティア活動の活性化や主体的な学級活動につ



写真1



写真2

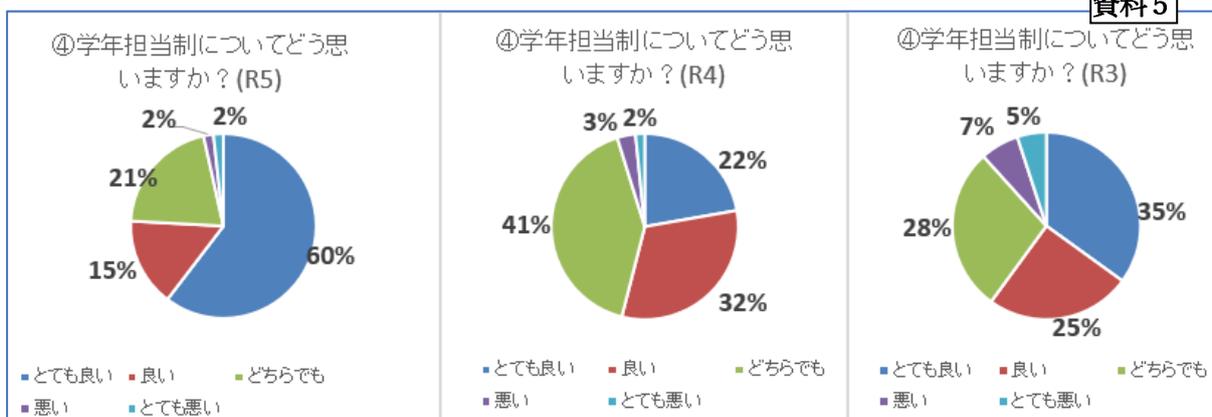
ながっていった。朝、ボランティア活動をする生徒（写真1）や昼休みに生徒会提案のSDGsに関するビデオ作りに学級委員を中心に主体的に取り組む姿（写真2）等が見られた。

5 成果と課題

(1) 成果

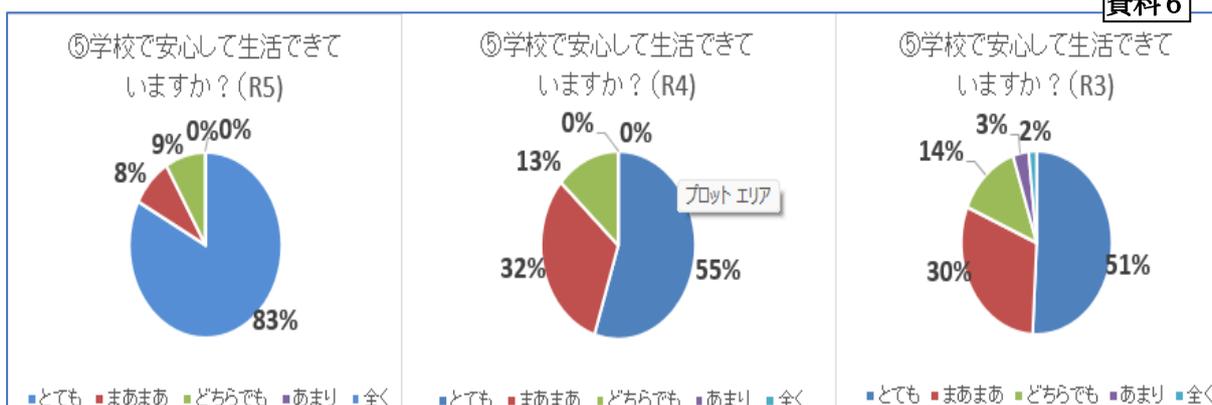
3年間の取組で、学級担任制よりも学年担当制がよいと答える生徒が増えた。初年度の1年生を経年変化で見た場合、3年間で学年担当制に対する抵抗感は減り、3年時では、とても良いと答えた生徒が60%に達している（資料5）。初年度、課題としてあげていた生徒の意見を職員で把握し、調整、改善していった結果であると思う。徐々に課題が改善され、その良さが定着していった。

資料5



また、同様に経年変化で「学校で安心して生活できていますか」の質問項目でも、肯定率があがっていった（資料6）。全職員で関わる体制が生徒の安心・安全な学校生活につながったと考える。

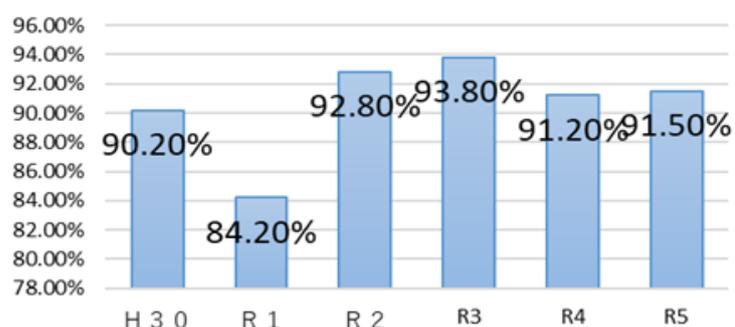
資料6



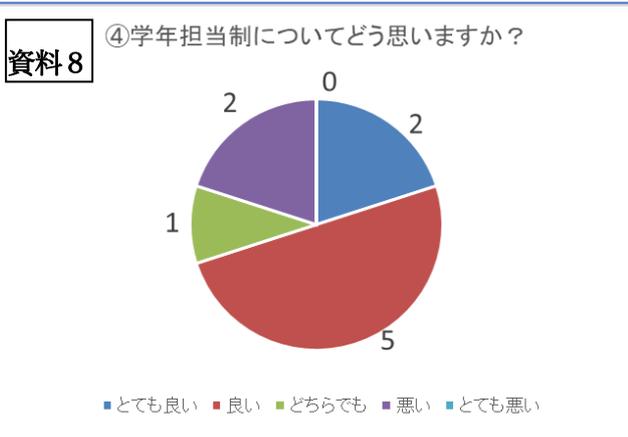
さらに、心のアンケートの結果では、学校全体の集計において、「学校に行くのは楽しいと思う」と答えた生徒の割合が、令和5年度では、91.5%で県平均を上回っており、令和2年度以降、高水準を保っていた（資料7）。安心・安全な雰囲気が全体に浸透し、楽しい校風が作られたのだと考える。

資料7

学校に行くのは楽しいと思う



また、職員のアンケートの結果でも、令和4年度の結果ではあるが、学年担当制に対して肯定的な意見が10人中7人であった(資料8)。良い点としても、資料9に示す内容が数多く挙げられた。先生方の精神的な負担の軽減やチームとしての一体感を強く感じる事ができた。



【良い点】	資料9
○学年の先生方全員で見ているという意識で心強かった	
○2クラスの生徒の様子が見えたり、生徒もいろいろな先生と接して良かった	
○学年の同一歩調	
○負担軽減、いつでも休める(1人1人の負担感はとても少ない)(3)	
○1人を多くの先生で見ることができる	
○精神的な余裕がある(2)	
○定期的リセット、リフレッシュができる(2)	
○生徒にとっても、いろんな先生の中から話せる人を見つけることができる	
○担任の力量不足を補う→担任のせいではなくなる	
○情報共有ができ学年全体もまとまりやすい	
○先生同士で相談しやすい	
○生徒のことを担任任せにせず、学年みんなで見ている感じがする	
○学年部で情報を早めに共有する必要があるため、対応が迅速にできる	
○生徒が担任と「合う」「合わない」がなくなる	
○朝の会、帰りの会、給食指導、道徳などを分担できるのはとても助かった	
○いざという時(担任不在)、学年全体で子供を見てくれるという安心が保護者にはある	
○チームで密に動いて情報共有がしやすい	

(2) 課題

スタート時に不安要素などの課題が出る事が想定される。意識調査をしながら、1つ1つ改善していく必要がある。

また、職員の個性もそれぞれであり、学年配当には気を遣わなければならない。メリットを最大限に生かせるように学年会や各部会等での情報交換・情報共有は密にしなければならない。

6 おわりに

現在の喫緊の課題である教員不足や指導力低下等の問題を解決するには、チーム担任制は今後不可欠な学校運営体制だと確信している。実践中の期間に、別の町の学校から校内研修に招かれ、チーム担任制の取組について話をした。また、管外の学校の校長先生からは、問合せの電話もいただいた。必要性に駆られている学校は少なくないと思う。

現在勤務の学校は、小規模校(学年1クラス)で、学年は、学年主任と担任の構成で成り立っている。ただ、年度初めの学校経営方針では、チーム担任制の意識で生徒と関わることを職員には伝え、教育実践を行っている。

この論文の内容が、少しでも必要とされる学校の教育実践の参考になれば幸いである。